特集2 新春特別インタビュー

野見山暁治さん

日本美術界の重鎮

現在制作中の作品（タイトル未定）の前で

空・海・風　うつろう自然と向き合い生み出されるメッセージ

1976年に志摩の丘陵中腹にアトリエを構え、以来、東京で活動しながら
1年の約3分の1を糸島で過ごしている野見山さん。
ここは彼にとって日常の雑念から解放され、創作活動に没頭できる場所。
ときに穏やかで、ときに荒れ狂う自然の姿を目の当たりにし、
自然を司（つかさど）る神の存在を感じ畏敬の念を抱くようになったという。
こうした環境から生まれるメッセージは、
力強く印象的で、見る者の心を捉えて離さない。

糸島の印象は

糸島の自然は本当に素晴らしい。姫島の近くへ陽が沈む夕焼けの光景を見ていると、地球上に自分だけがいるような充足感に浸れる。この土地で身近に触れ合う人々は、人情味に溢れ、気さくで細やかに気が利く。仕事に対しても熱心で誠実だ。

絵を描く以外の楽しみは

近くの海辺でシュノーケルを付けて、浅い海底を眺めながら過ごす。目の前を魚たちが泳いでいるのを見ることも楽しみ。

『しま』（1999年光村教育図書）
毎日カーテンを開けて行う「姫島との対話」を絵本にしたもの。島が消えたかと思うと、ある時ぐっと近づいたり。変貌する自然の姿に対する畏怖が込められている

御年91歳ですが、元気の秘訣は

なぜか日本人は年齢に対する固定観念が強い。悪いクセだ。よく「何歳まで絵を描き続けるか」と聞かれるが、そんなことはどうでもよい。毎日絵を描いていたら月日が経って、気づいたら90歳を過ぎていただけのこと。

描かれる絵はとても抽象的。どんな意図があるのか

絵とは、目に見えるものをそっくりに写そうとすることではなく、それから感じる大きさ、優しさ、深さといったものを伝えることだと思っている。

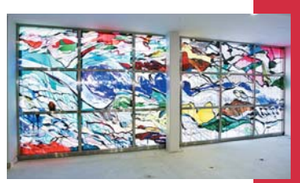
糸島市民へメッセージを

人はいつからか自然を省（かえり）みなくなった。非常に残念なこと。糸島の空は、晴れていても曇っていてもそれぞれに美しい。体全体でおいしい空気を吸うことが出来る。都会とは全く違う。そして、自然の恩恵を受ける富と、住んでいる人のバランスがとてもうまくいっている。気付かないでしょうが素晴らしいこと。そして、今ある人情をいつまでもたいせつにしてほしい。

（インタビュー／平成23年11月18日、志摩のアトリエにて）

アトリエ正面に浮かぶ姫島
この景色を、野見山氏はかつて次のように語っている。
「いつ頃からか、この退屈そうに見えた景色を、わたしは警戒するようになった。騙されてはいけない。自然は変貌する。空が突如として落下し、海が呼応して荒れ狂う。はるか下の方に打ち寄せていた波が、ごうごうと鳴りひびいて迫りあがり、窓をもひとまたぎにしてわたしを呑みこもうとさえする。恐ろしいことがあるものだ。以来わたしはこの穏やか海に心を許さない。爽やかになびく草花も、照り返る浜辺の白い砂も、ことごとくデーモンの支配下だということをわたしは知らされた。すべての景色はうつろうものだ。今ある形は束の間のことだ。魔性を孕んでいるものは美しい。」

姫島へ沈む夕陽は格別。
自然は厳しく優しく、
私たちを育ててくれる



『海の向こうから』
2011年JR博多駅4階　新幹線乗り換え連絡通路に設置されたステンドグラスの原画を手がけた。玄界灘を越えて受容されたわが国の古代文化。そんな古に想いを馳せて描いたもの

野見山暁治（のみやまぎょうじ）

1920年　福岡県穂波村（現飯塚市）生まれ
1943年　東京美術学校油画科卒業後、間もなく応召、満州へ
1952年　フランスへ渡り12年間を過ごす
1958年　第2回安井賞受賞
1968年　東京藝術大学で教壇に立つ（～1981年）
1978年　第26回エッセイスト・クラブ賞受賞
1992年　第42回芸術選奨文部大臣賞受賞
1996年　毎日芸術賞受賞
2000年　文化功労者に選ばれる
2011年　西日本文化賞受賞